

# 農林水産大臣賞受賞

いつまでも輝き続ける笠岡諸島

とくてい ひ え い り かつどう ほうじん  
受賞者 特定非営利活動法人

しま がいしや  
かさおか島づくり海社

おかやまけんかさおかし  
(岡山県笠岡市)

## 地域の沿革と概要

笠岡市は、岡山県西南端に位置し、西は広島県福山市と、南は笠岡諸島を含み、風光明媚な瀬戸内海を隔てて香川県と接する中核市であり、古くは門前町として栄えてきた。また、笠岡市は天然記念物カブトガニの生息地として知られている。

人口は54,480人(2010年10月現在)、高齢化率は30.0%、年少人口率は11.6%であり、面積は136.03 km<sup>2</sup>である。

地理の特色としては、山に囲まれ、平野が少なく、瀬戸内海に中小30有余の島が四国の香川県多度津町との間に飛び石状につながる笠岡諸島を有し、その中でも居住している島が7島あり、これは県下でも最も多く保有している市である。

平野部が少ないことから江戸時代から盛んに干拓事業が行われており、その集大成ともいえる笠岡湾干拓地(農業用干拓地として日本で2番目)が平成2年に整備されたことなどが特徴である。

農業は、小雨で温暖な典型的な瀬戸内海型気候であることから、基幹作物である水稲を中心に、果樹、野菜、花き、畜産など多様な農畜産物が生産されている。

漁業は、魚介類の種類も豊富な岡山県下でも稀な好漁場が形成され、古くから漁業活動が活発に行われてきた。近年では漁獲

第1図 位置図



白地図 KenMap の地図画像を編集

第1表 地区の概要

事項	内容	
地区の規模	6島(10集落)	
地区の性格	広域的な集団	
漁家率 (内訳)	15.60%	
個人経営体 (内訳)	総世帯数	1,339戸
	漁家世帯数	218戸
	228戸	
漁業種別 (漁業産出額)	専業	135戸
	兼業(主)	31戸
	兼業(従)	62戸
漁業種別 (漁業産出額)	海面漁業	577(百万円)
	のり養殖	22(百万円)

量の減少に伴い、資源獲得型の漁業から、資源育成型ともいえる「海洋牧場」などといった漁業への転換がなされている。しかし、農業、漁業とも担い手不足に悩んでおり、次代への継承が課題となっている。

## むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

瀬戸内海の笠岡市沖に浮かぶ笠岡諸島は、中小30有余の島が南北に帯状に点在し、地形は大部分が起伏の激しい丘陵地であり、気候は温暖・小雨で典型的な瀬戸内海気候である。

笠岡諸島地区は、このうちの人々の生活する有人島である高島、白石島、北木島、飛島（大飛島・小飛島）、真鍋島、六島の6島からなる。

本地区は、水産資源に恵まれ"さかなの島"として定着した高島、白石踊りなど国指定文化財を有し観光地として賑わいを見せる白石

島、本地域最大の島であり北木石を産出する北木島、のどかな漁村の佇まいを残している真鍋島、砂洲の存在と椿の栽培で有名な大・小飛島、水仙が生育し美しい景観を有する六島など、各島がそれぞれ固有の特性を有している。

また、自然環境に恵まれ、瀬戸内海の島々とそれを取り巻く空と海が穏やかで美しい景観を織り成し、四季折々の表情を見せているとともに、人情味あふれる住民とのふれあいや都会の喧騒から離れた静かな暮らしなど、訪れる人々に心の安らぎを与えてくれる環境も有している。さらに、本地域には、古くから瀬戸内海航路の要衝として栄えてきた歴史があり、高島行宮遺跡などのそれを物語る名所旧跡や白石踊りなどの長年の間培われてきた独特の伝統・文化が現在も残されている。

しかしながら、離島地域であり、地区の人口は戦後の最盛期には全島合わせて10,000人を超えていたが、現在はその4分の1近くに激減して2,378人となっており、過疎化が著しく、高齢化率は59.5%にも上る一方、年少人口率はわずか4.2%と低く、少子高齢化の状況にある。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機、背景

海に囲まれた笠岡諸島地区は、瀬戸内海の真ん中に位置し豊富な魚介類にも恵まれ、昔から漁船漁業が盛んであったが、そのため、養殖漁業が立ち後れ、昨今の環境の変化により漁獲高は著しく減少し、収入にも大きく影響している。また、主産業である石材産業も外国材に押され斜陽になり、地域は衰退の一途をたどり、急速な少子高齢化が進むなか、地域の存続も危ぶまれる状況にあった。

このような中、平成9年に笠岡諸島有志による「島の討論会」が開催された。討論会では、まずお互いの島を知り、島民どうし顔見知りになるために「島の大運動会」を



写真1 笠岡諸島地区

開催しようという案が出され、現かさおか島づくり海社鳴本理事長を会長とする「島をゲンキにする会」が設立された。

6島合同の島の運動会は第1回の北木島での開催から平成22年で13回目を数える。島づくりの活動は島の大運動会とともに進んできた。

「島の大運動会」から、女性の活動グループ「笠岡諸島生き生き会」や笠岡市による島民の活動をサポートする「島おこし海援隊」の活動が生まれた。個々の島の活性化を越えた6島を1つの島と考えるとともに各島が互いに競争と連携を深めながら行うむらづくりの機運が醸成された。



写真2 島の大運動会

平成14年、島おこしに積極的な島民による任意組織「電腦笠岡ふるさと島づくり海社」の設立を経て、平成18年には、地域での話し合いの結果、従来の自治組織では過疎化・高齢化に迅速に対応できない、また、持続的な運営のために「経営感覚」が必須との思いから、「NPO法人かさおか島づくり海社」が設立された。

## (2) むらづくりの推進体制

### ア NPO法人かさおか島づくり海社

NPO法人かさおか島づくり海社は、地域の公共的役割を担い、広く一般にサービスを提供しながら、住民の創意工夫と連携強化による笠岡諸島の自立的発展を促進し、生活の安定及び福祉の向上の寄与を目的としている。このため、同法人では、人口の一番多い北木島に本社を置き、各6島に支社を組織する等して、福祉、教育、特産品開発、まちづくり等幅広く住民をサポートする事業を展開している。活動の方向付けは、6島の支社長と理事により毎月の役員会を開催し行っている。各支社の事業は本社からの補助で行われるが、持続的な島づくり活動に必要な経営感覚を身につけるため、事業費の3割相当額を本社に償還する仕組みとなっている。本社と各支社は、島民の困り事や要望を受け事業化している。また、各種活動は「島おこし海援隊」と協働で取組が進められている。

### イ 「島おこし海援隊」

笠岡市の「島おこし海援隊」は、平成12年の真鍋島において開催された島の大運動会で行われた競技の一つである「島からの主張」を契機とするものである。

このとき、「島の人はやる気はあるが、アイデアがない。私たちは仕事をもったの活動で事務局的にサポートしてくれる職員を島に派遣して欲しい。」という主張に対し、笠岡市長が応えたものである。平成13年に笠岡市長の特命とし

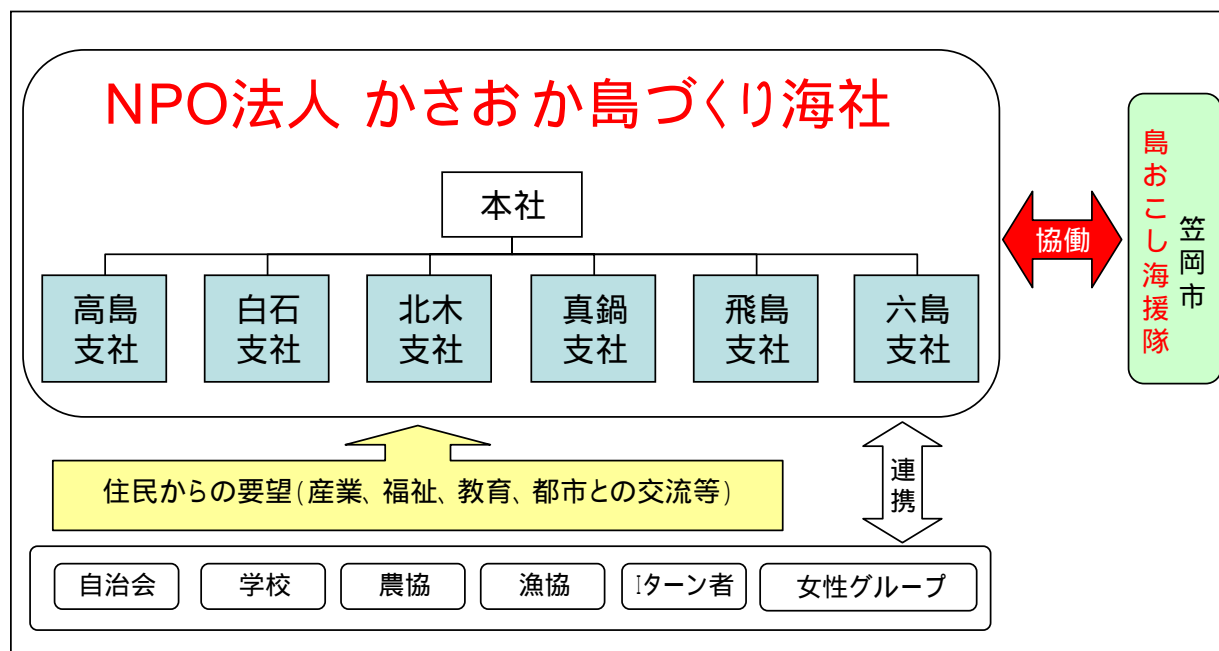


写真3 島おこし海援隊

て、やる気のある市職員3名が「島おこし海援隊」として派遣された。

このときの市長からの指示は「島民になれ」というものであった。「島おこし海援隊」は、自分で課題を見つけるとともに、島の人を助けるため何でもやる。また、市役所と島民をつなぐパイプ役として活動を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図



## むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

離島という厳しい自然的制約条件の下、過疎化、少子高齢化という問題に対し、笠岡諸島の有人6島が連携し取り組んでいる。NPO法人かさおか島づくり海社は、住民のやりたいこと、やらなければならないことをサポートする役割を担っている。また、NPO法人かさおか島づくり海社は、笠岡市の行政組織である「島おこし海援隊」とともに活動を行っており、新たなNPO法人と行政と住民の協働活動のモデルケースであり、昨今、叫ばれている「官民協働」の先駆的なものとなっている。

NPO法人かさおか島づくり海社の各種事業は、島民の要望を具体化し、住民サービスの向上を図るとともにIターン者を含めた地域の雇用創出につながるものである。また、各島が連携するとともに競い合うことで地域の活性化を図るものである。

### 2. 農業・漁業生産面における特徴

#### (1) 各島(支所)の取組

過疎・高齢化が著しい離島地域では、人口減少とともに働く場の確保が難しく、若い働き盛りの年代は島を離れている。年々深刻化する高齢化に伴い、遊休地や荒廃地が年々増えていることが大きな問題となっている。

真鍋島支社ではJAと連携し、平成13年から「ゴーヤ」栽培を奨励し、その生産拡大とともに販路拡大を進め、現在では岡山県下有数の産地となっている。また、干しゴーヤ



やゴーヤうどん等、二次加工品としての付加価値を加え、島の特産品として販売を進めている。白石島支社では、平成14年に小学校の遊休地を利用して、かつて行われていた綿の生産から糸づくり、染色、機織りまで一貫して行う活動を開始し、綿づくり体験や機織り体験を通じて地域振興を進めている。また、平成21年から島の荒廃地に自生している「桑」に注目し、平成21年度地方の元気再生事業(内閣府)の認定も受け、良質の「桑の葉(桑茶)」づくりに島を挙げて取り組んでいる。

飛島では、古くから藪椿が群生しており、椿油を収穫していた。近年、生産は途切れていたが、中学校の総合学習のテーマとして取り上げられたことをきっかけに、平成15年に「椿油搾取機」を導入し復活させた。現在は島を挙げての椿を活かした島づくりに取り組んでいる。

## (2) 灰干しの加工・販売

平成20年、東京都三宅島の復興に取り組む早稲田エコステーション研究所と共同で「魚の灰干し」を開発した。「魚の灰干し」は、三宅島の火山礫を北木島の石材加工技術を生かして粉状にし、瀬戸内海の獲れたての魚を加工し不織布などに包んだものを、火山灰の中に挟むことで水分と臭みを吸収させるものである。試行錯誤の結果、旨みを凝縮させ、鮮魚のみずみずしさと干物の旨みを併せ持ったものができた。



写真4 魚の灰干し

平成21年7月にはNPO法人かさおか島づくり海社のノウハウを移転した「株式会社島のこし」を立ち上げ、同年11月に、北木島に加工場を整備し、加工販売を開始した。これにより、新たな地域の特産品ができるとともに地域の雇用が生み出されている。現在、年商2,000万円を目指し、インターネット等を通じ島の特産品として売り出している。

## (3) アンテナショップ「ゆめポート」

平成19年9月、陸地部の笠岡商店街にアンテナショップ「ゆめポート」を開設した。「ゆめポート」は年間を通じて味付けのりやひじき、椿油、石の加工品などを販売している。笠岡諸島各島の特産品の販売を通じて島の農業漁業を中心とした産業振興の一翼を担っている。また、「ゆめポート」は、笠岡諸島のPRの前哨基地として様々なイベントなどに出展することにより、特産品や笠岡諸島の情報発信、陸地部の方々と島との交流の場と位置づけ、陸地部の島の窓口としての機能も担っている。



写真5 ゆめポート

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 福祉関連事業

NP0法人かさおか島づくり海社による有人6島をつなぐ活動は、これまで低迷気味だった島おこしの機運を高め、同じ悩みを抱える島民どうしが連携することにより、数々の事業を進め住民サービスを向上させている。

#### ア デイサービス事業

高齢化の著しい笠岡諸島において、最大の問題は医療と福祉の確保である。高齢者が独り暮らしで、自立して生活できない場合には、陸地部の身内に引き取られるのが一般的であった。高齢者の「島に最期まで住みたい」というありふれた願いも、専門職員の確保及び採算等の理由により、介護事業者の参入の難しい離島地域においては困難な状況にある。

このため、平成19年2月、北木島に空き屋を活用した、島の住民を雇用し島の住民の手で運営するデイサービス施設を開設した。

現在では、北木島、白石島に3ヶ所の通所デイサービス事業を展開しており、今年度には新たに真鍋島でも事業所の設置を予定している。また、介護保険制度上の介護事業所のため、介護報酬として島外から「外貨」が入ってくることにより、島の活性化にも寄与している。



写真6 デイサービス「ほほえみ」

#### イ 過疎地有償運送事業

島にとっては海上交通が住民の足として大きく位置づけられるが、面積の大きい北木島については、港から遠い地域では港までの足の確保が大きな問題となっていた。

平成18年に法人格を取得したことから地域限定で有償運送を行える過疎地有償運送事業（タクシー事業）を行っている。

#### ウ 保育施設「あゆみ園」

六島では、平成15年に児童の減少により小学校が休校となったが、平成18年に就学前児童が4名できたことに伴い幼稚園の設立要望があった。このことから、笠岡市の委託を受ける形で就学前の保育として「あゆみ園」を設立した。

なお、平成19年には、1名の児童が新一年生となり六島小学校が5年ぶりに再開した。



写真7 保育施設「あゆみ園」

#### エ 日用品や食品の”御用聞き”サービス

高島では、平成20年に最後の小売店が閉店した。平成22年、NPO法人かさおか島づくり海社高島支社は、商店がない高島の生活を支援するため、日用品や食品の”御用聞き”サービス「婆ーちやるショップ高島家」を始めた。月に3回、商品を笠岡駅前の商店街に発注し、島に配送する。島民からは、「笠岡に行く船代分で商品が買えるので助かる」と好評である。

## (2) 空き屋対策事業

平成15年から、団塊世代を中心とした「田舎暮らし志向」に注目し、空家と遊休地を活用した「空き屋対策事業」を展開している。「団塊留学」や「移住体験ツアー」を実施するとともに、インターネットを通じた広報やテレビでの紹介もあり、平成16年に高島へ移住された方を第1号として、平成22年4月現在では笠岡諸島4島に団塊の世代や子育て世代の計32世帯70名が移住している。真鍋島での「移住体験ツアー」は、将来的な学校存続が危ぶまれる中、子どもを持つ家族誘致を目的とし、移住者がプロジェクトリーダーとなり、地域住民とともに移住希望者の夏祭りへの参加や民泊等を行っている。



写真8 笠岡諸島に移住した皆さん

移住者は、食堂、レストラン・民宿の起業や、島づくり海社の行う各種福祉事業等へ就職するなど、地域の活性化の役割も担っている。高齢化の著しい島における「空き屋対策」は、地域を維持する人材の確保のみならず、子どもを育てる若年世帯の移住もあり、小中学校の子ども確保にもつながっている。

## (3) 「島弁」

「島弁」は平成17年にNHKの島おこし企画により、6島それぞれが島の特色を活かし開発したものである。「島の食材」を「島の人」が「島で作る」、「島弁」は、島の食材に改めて島民自身が注目するきっかけづくりになった。「島弁」は都市住民へのもてなしとして提供する観光的な資源であるが、それを食する都市住民の反応は生産者にとって大きな励みとなっている。



写真9 各島の特色を活かした「島弁」

また、「島弁」の開発を機に笠岡諸島6島の中で4ヶ所が新たに飲食業の営業許可をとり、地域の高齢者のための昼食弁当サービスの拠点として高齢者福祉のためにも大きな貢献を果たしている。

## (4) 都市住民との交流

笠岡島めぐりツアーや六島の水仙ツアー等のイベントの開催。平成17年からは、北木島の廃校を利用した中学校夏期研修の誘致。平成20年には、真鍋島では交流施設「潮待ち茶屋 五里五里」の開設等、笠岡諸島の島民と都市住民との交流について積極的な取組がなされている。

また、NPO法人かさおか島づくり海社は、笠岡諸島の歴史や文化、慣行など魅力を紹介したガイド本「笠岡諸島ぶらり散策」を発刊した。本書は、「カメラ散歩」、「島のおかみさんが教えてくれるなるほど話」、「ぶらり散策」などからなり、全島を網羅し、細かな見所紹介や島巡りモデルコースを付けるなど本格的なガイドブックとなっている。